OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	指小辞/-ko/に関する意味記述 : 青森県津軽地方・弘前方言を例に
Author(s)	阿部, 貴人
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 1999, 1, p. 16-24
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23171
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

指小辞/-ko/に関する意味記述

－青森県津軽地方・弘前方言を例に－

阿部貴人

【キーワード】意味素性、カテゴリー階層、基本レベル・カテゴリー、プロトタイプ効果

1. はじめに

本稿は、青森県弘前方言におけるいわゆる指小辞/-ko/(東北一般に使用される)の下接に関する制約とそれに関わる認知意味論的側面を記述するものである。先行研究では、指小辞「コ」の「基本的意味」について幾つかの性格が示されている(後述)。本稿の立場は、「コ」の「基本的意味」を記述するのではなく、「コ」の下接しうる語、下接しえない語を範疇化することにある。まず 2.で、扱う形態と資料、および音韻的制約を示し、3.で「コ」の「基本的意味」を記述した先行研究をみる。4.で統語的制約・意味素性による制約を記述し、5.では制約以外に認知意味論的な側面が関与していることを提示する。また、6.では制約が解除される文脈について考察する。

2. 扱う形態と資料

本稿で扱う形態は、(1)(2)のように促音が脱落することもある。促音音素の挿入が禁止されるものは、(3)'のように先行する音素が撥音音素の場合であり[1]、促音の脱落が禁止される環境はない。従って、本稿では便宜上、促音の入らない/-ko/で統一する。また、必要に応じて音素表記する場合は便宜的に/ko/の前に「-」を挿入し、そのほかは「コ」と表記する。

(1)	[makko]/maQ-ko/{馬}	[ma'dokko]/madoQ-ko/{窓}[2]
(2)	[mako]/ma-ko/	[ma'doko]/mado-ko/
(3)	[hoNko]/hoNko/{本}	[paNko]/paNko/{パン}
(3)'	*[hoNkko]/hoNQko/	[paNkko]/paNQko/

/-ko/はいわゆる「母音間の無声子音の有声化」は起こさない。これは、①形態的な制約(「コ」が接尾辞として独立しているという話者の分析によって有声化しないという観点)と、②音韻的な制約(「コ」は/-Qko/であり、無声子音の先行音素が促音の場合には有声化しないという規則が働いているとする観点)が考えられるが、本稿ではその回答を用意してはいない。

また、「コ」の出自や下接規則の変化といった通時的な側面についてはふれず、共時的な体系に焦点をあてることにする。世代差・地域差などによる差異や規則拡張の問題も重要であるが(重要であるからこそ)、第一段階として共時的な記述を目指す。

なお、本稿で資料とするのは、筆者の内省に限らず、当該方言の中年層(2 人)・老年層(1 人)の談話資料(約 30 分× 3 談話) も使用する。つまり、青年層(筆者)・中年層・老年層では、使用語彙の違いよって「コ」の下接しうる語彙数は異なるが、ある語彙が三年層に

共通して使用語彙である場合には下接制約の差異は現れないのである。「コ」の下接する、あるいは下接しない語彙の適格性判断は(使用語彙の差を除けば)三年層で共通しているのであり、この点からは年代差よりも地域差が大きい可能性がある。

なお、音韻的制約として、/ko/の連続が禁止される。

(4) */haNko-ko/{判子}、*/reRzoRko-ko/{冷蔵庫}、*/soRko-ko/
*/pats'iNko-ko/{パチンコ}、/keiko-ko/{稽古}

但し、当該方言の「母音間の無声子音の有声化」規則が適用される語はこの限りではない。

(5) /ta'bago-ko/{たばこ}、/tago-ko/{蛸}、/hago-ko/{箱}、/nego-ko/{猫}
/nogo-ko/{のこぎり}、/sogo-ko/{底}

/ko/の連続が禁止されるという制約は以下でみる制約や認知意味論的現象よりも強く(あるいは先に)働き、文脈による制約の解除が適用されないものである。ここでは、以下のようにまとめておく。

(6) 語の最終拍が/ko/である場合、「コ」は下接できない。この制約は他の制約より強く(先に)働く。

3. 先行研究

指小辞「コ」に関する先行研究としては、此島(1956、1968：114-115)、小林(1950：84-87)、藤原(1986：139-140)、日野(1958：47-49、1986：164-167)、北条(1957)などがある。これらは指小辞「コ」の「基本的意味」を記述するものである。

先行研究をまとめると、概略次の５つになる(用語は先行研究に従う)。

Ⅰ．小さく、かわいらしい生物の名称を表す単語のあとにつけて、話し手の対象に対する親しさ、愛情などを示す。

従来、指小辞「コ」の本来的性格とされたものである(「コ」の出自を「小」とみていると思われる)。これについては、幾つかの先行研究で既に反例が示されているが、本資料から例をあげると次のような語に下接しうる。

(7) 犬、猫、蝿
(8) 蛇、ゴキブリ
(9) 山、川、空
(10) テレビ、アイロン、バット

(7)のように生物には確かに下接するのであるが、親しさや愛着を持たないと内省(日野1958、本調査の中年層・老年層)される(8)、無生物である(9)(10)にも下接する。また、(9)から、物質的・空間的大きさとも無関係であると言える。

Ⅱ．無生物である場合は生物化され、更に人格化されて話し手の圏内に入る。

無生物に「コ」が下接することに対する記述であるが、(9)(10)が生物化していると積極的に肯定する根拠は示されていない。また、(8)が話し手の圏内に入るとは認めがたいところである。さらに、「人格化する」とあるが、後述のように、「コ」は意味素性として「人」

を表す語には下接しない。

Ⅲ. 聞き手(主として子供)に対して、言葉使いを優しく、丁寧にする。

「コ」は聞き手が子供以外でも、また、プラス待遇を必要としない聞き手に対しても使用される(本調査の談話)ことをみても、このような性格を有する根拠は見出せない。

Ⅳ. 対象物を卑下する。「小さいもの」の意から拡張したと考える。

「コ」は対象物を卑下する場合にのみ使用されるわけではない。つまり、卑下的意味が付加される場合と、付加されない場合の記述をする必要がある。

Ⅴ. 「コ」は生物・事物・事柄等を表わす名詞のあとにつき、その語で表わされる対象が、その話し手によって具体的に把握されていることを表わす(日野 1958)。

日野(1958)の例によれば、

(11)イダチダバ、オエノ、板敷ノ下ニモ居ダッキャサー、イダチコ (下線部筆者)
{いたちなら、私の家の板敷の下にもいたよな、[あの]いたち}

文頭の「イダチ」は「いたちというものは居たかどうか」と抽象的に把握したために「コ」が下接されず、文末の「イダチコ」は「イダチ」が居たことを思い出し、具体的に把握されたために下接されたという説明がとられている。しかし、(11)は同じ文脈で次のように置き換え可能である。

(11)' イダチコダバ、オエノ、板敷ノ下ニモ居ダッキャサー、イダチ

(11)'' イダチコダバ、オエノ、板敷ノ下ニモ居ダッキャサー、イダチコ

(11)' (11)'' のように、(日野 1958 のいう)抽象的把握に「コ」が下接し、具体的把握に「コ」が下接する必要がないことをみても、この記述の妥当性には疑問が残る。

ここでみたⅠ～Ⅴのうち、1つが典型的性格であって、用法の拡張があったとみることも可能ではあるが、いずれにせよ、Ⅰ～Ⅴの記述のみによって本資料の「コ」を説明することはできない。次節では、「コ」の下接するものからではなく、「コ」の下接し得ないものの統語的、意味的制約から記述を行う。

4. 「コ」下接の禁止則

4.1. 統語的制約

(12)馬コ、鳥コ、機械コ、テレビコ

(13)太郎さま、次郎どの

(14)一本、二冊、三番

(15)甘み、甘さ

(16)甘みコ、甘さコ

(17)テレビコ、アイロンコ、機械コ、自転車コ

(18)*動くコ、*早いコ、*早くコ

「コ」は上記(13)～(15)の下線部を付した形式と同様に、それ自体では独立せず、基体(base)に付着する接尾辞(suffix)である。但し、(13)～(14)は意味を添加するのみであるが、(15)は付着して名詞を形成し、「コ」と共起する(16)。また、「コ」は(17)のように外来語、漢語にも下接する。さらに、(18)のように名詞以外には下接しない。

ただし、「コ」は固有名詞に下接することはできない。これは、後に述べるカテゴリー階層と密接に関係しており、後述する。

(19)*太郎コ、*富士山コ、*大阪大学コ、*弘前コ

更に、(20)のように形容名詞(adjectival noun)に下接することもできない。但し、動名詞(verbal noun)の場合は下接するのであるが、注意が必要である。

(20)形容名詞：*愉快コ、*明瞭コ、*大事コ、*哀れコ、*丁寧コ

(21)動名詞：a 立ち読みコ、ものまねコ、テストコ

b 運転コ、取り調べコ、洗濯コ

(21a)は影山(1993)でいう〈格なし動名詞〉、(21b)は〈格あり動名詞〉である。つまり、前者は直接目的語にヲ格を取り得ず、後者は取りうる。しかし、いずれにせよ、「コ」が下接するためには(23a)(23b)のように名詞句を形成する必要がある。

(22)a *本を立ち読み中に･･･

b 車を運転中に･･･

(23)a 本の立ち読みコする {[本の立ち読み]をする}

b 車の運転コする {[車の運転]をする}

(23)' a 本を立ち読みする

b 車を運転する

(23)'' a *本を立ち読みコする

b *車を運転コする

(23a)(23b)は一見すると、動名詞＋機能動詞「する」の内部に「コ」が挿入されているように見えるが、単に格助詞の省略であり、動名詞＋機能動詞「する」の場合には(23)'のようにヲ格を必要とし、(23)''のように「コ」が挿入されることはない。

ここまでをまとめると、「コ」が下接する語は、

(24)固有名詞と形容名詞以外の名詞

ということになる。

4.2. 語彙の意味的制約(意味素性)

ここでは語彙の「コ」が下接されない意味素性を抽出する方法をとる。これは語が如何なる意味拡張を起こしたとしても、素性の抽出という方法によって二項対立的に記述できるわけである。

先行する名詞が意味素性として「人間」という素性を持つ場合、「コ」は下接不可となる。

(25)*料理人コ、*編集人コ、*先生コ、*市民コ、*歌手コ、*バッターコ

*エフリシコ{いい格好をする人}、*ウソシコ{嘘をつく人}

cf. 料理コ、編集コ、歌コ、バットコ、嘘コ

(26)医者コ、人コ

(27)江戸＋こ「子」→江戸ッこ　　{[－人]＋こ「子」→[＋人]}

テレビ＋こ「子」→テレビっこ　　{[－人]＋こ「子」→[＋人]}

(27)のように、標準語にみられる「ッ子」は[－人]を持った語に下接して[＋人]の語を形成する。つまり、「ッ子」が[＋人]を持っているということが言える。仮に指小辞「コ」の出自が「子」であるとすると、(25)のように[＋人]という意味素性を持った語に、[＋人]を持つ「コ」が下接されない(意味の重なりを避ける)という可能性はある。３章のⅡを、積極的に否定しなかったのはこのためである。

また、(26)は以下の(28)～(31)は、

(28)医者ヨサ行く　{病院へ行く}

(29)*医者ヨになる　{医者になる}

(30)人コがいい　{性格がよい}

(31)*人コがいる　{人がいる}

この場合は、医者＝病院(あるいは医者＝治療)、人＝性格であって、[＋人]という意味素性を持たないのである。これもまた、意味拡張の例であるといえる。

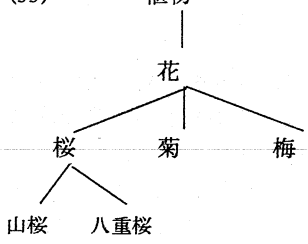
意味素性による制約は、次のようになる。

(32)[＋人]という意味素性を持つ語には「コ」は下接しない。

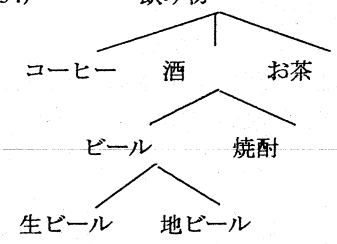
5.認知意味論的現象

ここで、プロトタイプ理論(prototype theory)を援用し、概念カテゴリーの内部構造のうち、上下の構造(カテゴリー階層)に注目すると、(33)(34)のようになる。

(33)



(34)



(33)(34)は、カテゴリー階層の上位(superordinate)レベル、基本(basic)レベル、下位(subordinate)レベルを図示したものである。基本レベルには、次のような一般的特徴が備わっているといわれる。

(35)a　範疇の要素が知覚上似通った形を示す最上位のレベル

b　一つのメンタルイメージで範疇全体を表せる最上位のレベル

c　範疇要素のいずれとも同じような動作や運動で対処できる最上位のレベル

d　もっとも短時間で範疇要素を同定できるレベル

e　もっともよく使用される名前がついているレベル

f　子供が名付けや理解のできる最初のレベル

g　基礎語彙となるレベル

h　単一形態素からなる語で表現されるレベル

i　中立的文脈で用いられるレベル

j　我々の知識の大半が整理され構造化されるレベル　　(杉本 1998：83)

また、基本レベルカテゴリーの語は、語構成からみても、他の語と結びついて新しい語を作りやすい(河上 1996)ことからみると、

(36)a　花束(その他、「見」など)

b　?桜束/?菊束/?梅束

c　??植物束

(37)a　酒癖(その他、「酔い」など)

b　?ビール癖/?焼酎癖

c　??生ビール癖/??地ビール癖

d　?飲み物癖

(33)(34)では花、酒が基本レベルの概念となる。(33)で「コ」の下接しないものは「山桜、八重桜」、(34)ではすべて可能である。いわゆる基本レベルカテゴリー(basic level categorization)に限らず「コ」は下接しうるのであるが、下位レベルカテゴリーにある語ほど下接しないという特性を持つ。

ここで見出される規則性は、次のように言うことができる。(前節で述べた意味素性による制約はここでも働く)

(37)　より下位のカテゴリーに「コ」が下接しうる場合、それよりも上位にある語には「コ」が下接しうる。

(38)　基本レベルカテゴリーの語には必ず「コ」が下接する。

このような現象の理由は何であろうか。上ではカテゴリー階層、つまり縦の関係についてみた。基本レベルカテゴリーに属する語は、プロトタイプ効果(prototype effect)が存在することは既に知られている。つまり、基本レベルカテゴリーの下位に位置するカテゴリーには、基本レベルの語にとってのプロトタイプ的なものと、周辺的なものが存在していることになる。例えば、(33)の「花」という基本レベルの語には、桜やバラなどの中心的なもの(基本レベルの一般的特徴がよく当てはまる語)と、ベゴニアやマリーゴールドなどの中心的でないものが存在する。この「コ」の下接とプロトタイプ効果による、横の関係をみると、プロトタイプ的な語ほど下接は自然であり、周辺的なものほど自然さを欠き、話者によっては下接できないこともある。このことは、次のように述べておく。

(39)ある語が、上位のカテゴリーに位置する語のプロトタイプ的な語であるほど「コ」が下接し、周辺的であるほど下接しにくくなる。

このように考えると、例えば、ある話者がある花を熟知し、その花の様々な種類を知っているとすると、その語がプロトタイプ効果を持つことも十分に考えられる。その場合には、「花」のプロトタイプとしては周辺的であったとしても、「コ」は下接しうるのではないか。つまり、カテゴリー化についても考慮する必要がある。別の観点から見れば、カテゴリーに関する現象は、話者によってゆれる可能性がある。

また、固有名詞に「コ」が下接しないことは上述したが、そのことはここでみたカテゴリーに関する縦横の関係で説明できるのではないだろうか。つまり、固有名詞は、縦の関係(カテゴリーの階層性)では下位レベルに現われやすく(少なくとも基本レベルには現れない)、横の関係(プロトタイプ効果)を持っているとは考えにくいのである。

6.　文脈による制約解除

ここでは意味に関わるものとして、すべての制約が解除される(音韻的制約以外のあら

ゆる語に「コ」が下接しうる)場合をみる。それは次のようなものである。

(40)先生コモ書ゲネ/読メネノナ{先生という漢字も書けない/読めないのか}

(41)先生コモ知ラネノナ{先生という職業/言葉/漢字も知らないのか}

これらがすべて「〜という漢字/言葉/職業/人」などを意味し、その語そのものの意味を持たないことは、(40)'(41)'をみるまでもなく明らかである。

(40)'「先生コモ書ゲネ/読メネノナ」　「先生コ」・[-人間]

(41)'「先生コモ知ラネノナ」　「先生コ」・[-人間]

cf.*先生コサナリテ{先生になりたい}　「先生コ」・[+人間]

また、肯定・可能の構文で現れる場合は、

(42)先生コモ書ケル/読メルノナ{先生という漢字も書ける/読めるのか}

(43)先生コモ知ッテラノナ{先生という職業/言葉/漢字も知っているのか}

となる。(40)(41)(42)(43)の発話が(子供に対してならまだしも)大人に対するものであれば、「卑下」という意味を持つことになる。但し、ここで「卑下」するのは「コ」に先行する対象物ではなく、聞き手となる。

(44)テレビコモ買エネ{テレビさえも買えない/買えるのか}

(45)考エコモネーノナ{考えさえもないのか}

(44)(45)のように上述の制約が問題とならない「テレビ」「考え」もこの文脈では(肯定・否定、可能・不可能のいずれでも)「卑下」の意味を持つ。先行研究で言われていた「対象物に対する卑下」も、この点を記述したものかもしれないが、「卑下」の対象はあくまで聞き手である。

なお、このような文脈を与えれば、「音韻的制約以外のあらゆる語に下接しうる」と述べたように、これまでみてきた統語的・意味的制約は機能せず、下位レベルにある語、プロトタイプ的でない語にも「コ」が下接する。

(46)a　名詞以外：鑑みるコモ書ゲネノナ{鑑みる[という漢字]も書けないのか}

b　固有名詞：太郎コモ読メネノナ{太郎[という漢字]も読めないのか}

c　形容名詞：確実コモ知ラネノナ{確実[という言葉]も知らないのか}

d　[+人]：インフォーマントコモ知ラネノナ
{インフォーマント[という言葉]も知らないのか}

e　下位レベルカテゴリー：山桜コモ見ダゴトネーノナ
{山桜[という植物]もみたことがないのか}

これについては、「小さなもの」という意味によって「鑑みるという漢字さえも」という意味拡張があったとも考えられる。

7. まとめ

以上のように、本稿では指小辞「コ」の下接制約について、統語的、意味的、音韻的環境から記述し、認知意味論的な現象をみた。まとめると、以下のようになる。

〈下接が禁止される制約〉

(47)固有名詞、形容名詞

(48)意味素性が[+人]

(49)/ko/連続の禁止

〈認知意味論的な現象〉

(50) より下位のカテゴリーに「コ」が下接しうる場合、それよりも上位にある語には「コ」が下接しうる。

(51) 基本レベルカテゴリーの語には必ず「コ」が下接する。

(52) ある語が、上位のカテゴリーに位置する語のプロトタイプ的な語であるほど「コ」が下接し、周辺的であるほど下接しにくくなる。

それぞれの関係を図示すると、以下のようになる。

(53)

〈文脈によっても解除されない〉
音韻的制約(/ko/連続の禁止)

統語的制約 〈文脈によって解除される〉	カテゴリー階層とプロトタイプ 〈話者によってゆれる〉

上述のように、これらの制約は通時的に見れば拡張されたものである可能性がある。その点は、地域差によって明らかになるであろう[3]。本稿は制約について述べたが、あくまで前段階としての記述であり、指小辞「コ」の性格を明らかにすることが最終的な目的である。本稿では認知意味論的なアプローチをとったが、範疇に関する理論的枠組み(家族的類似やIdealized Cognitive Model)については述べなかった。その点を考察することによって、指小辞「コ」の性格も明らかになると思われる。また、本稿では触れなかった拍数[4]の問題も検討されなければならない。この点に関しても今後の課題としたい。

【注】

1) 城田(1995)で述べるように、撥音音素Nのあとに促音音素Qが現れることはごく稀であり、本稿で対　象とする形式も例外ではない。

2) 活字の都合上、入りわたりの鼻音は「ˊ」で表す。濃音ではない。

3) 井上(1968)によれば、山形県西村山郡河北町谷地方言では、/-ko/のつきうる語は限られているとされ　ている。

4) この場合、標準語と方言のどちらの拍数であるかが問題である。但し、シラビーム方言である当該方　言では、シラブル数とするのが正確であるが、特殊音素が恣意的に脱落することを考えると、記述は　かなり困難である。

【資料】

本稿で使用した談話資料中に現れた指小辞「コ」は以下のとおりである。

のべ語数：38

異なり語数：12

水コ、菓子コ、袋コ、ショーコ{性格}、人コ{性格}、寺コ、墓コ、シャツコ、箱菓子コ、小屋コ、話コ

ジェンコ{お金}→常に「コ」が下接されて使用され、「ゼニ」のみでは使用されない。

【参考文献】

井上史雄(1968)「東北方言の子音体系」『言語研究』52
影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
河上誓作(1996)『認知言語学の基礎』研究社出版
此島正年(1956)「青森」『NHK 国語講座　方言の旅』宝文堂
(1968)『青森県の方言』津軽書房
小林好日(1950)『方言語彙学的研究』岩波書店
城田　俊(1995)『【テキスト版】日本語の音』ひつじ書房
杉本考司(1998)『意味論２ - 認知意味論 - 』西光義弘編『日英語対照による　英語学演習シリーズ８』くろしお出版
日野資純(1958)「青森方言管見」『国語学』34集
(1986)『日本の方言学』東京堂出版
藤原与一(1986)『続　昭和日本語方言の総合的研究　第 1 巻　民間造語法の研究』武蔵野書院
北条忠雄(1957)「東北方言瑣談」『兵庫方言』5
Lakoff,G.(1987) *Women,Fire,and Dangerous Things.*:Chicago. University of Chicago Press.
邦訳:池上嘉彦・河上誓作他訳『認知意味論』

阿部貴人(あべ　たかひと)
大阪大学研究生